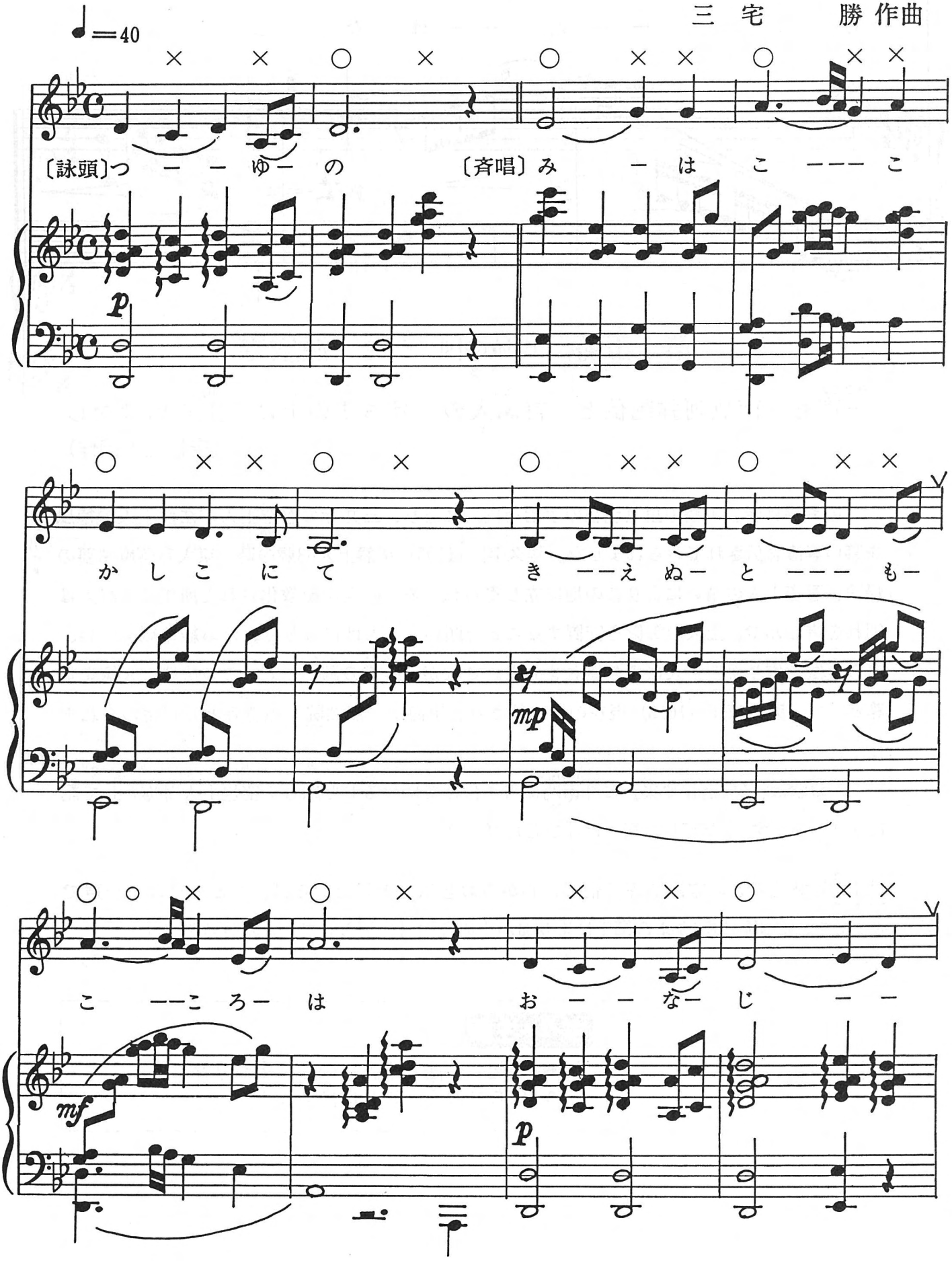
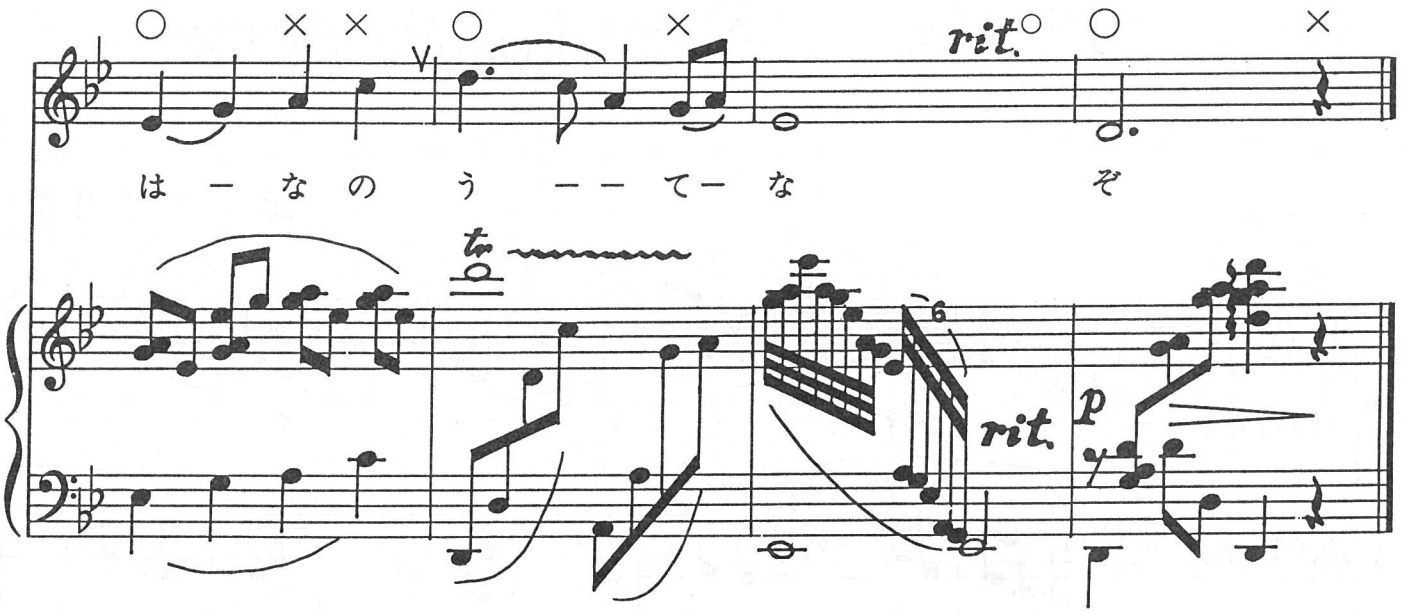
第十六番　光明寺の御詠歌（一蓮調）

（花のうてなの御詠歌）

三　宅　　勝 作曲

第十六番　山城の国 粟生　光明寺

露の身は　ここかしこにて　消えぬとも　心は同じ　花のうてなぞ
（法然上人御作）

光明寺は西山浄土宗の総本山であり、「浄土門根本之地」と称されています。承安５年（1175）法然上人43歳の時、浄土宗をお開きになり、元黒谷の報恩蔵をあとにして、浄土開宗の第一声を揚げられた故地であります。後に法力坊蓮生（熊谷直実）が、この地に一宇を創建し、御師法然上人を請じて開山の祖師と仰がれました。上人はこの静寂の地を愛し給うて、念仏三昧院と名づけられました。尚この地は、法然上人滅後16年目に、ここで御遺骸を荼毘に付した霊地でもあります。

《お歌の背景》　このお歌は、法然上人が讃岐へ御流罪になられる時、今生の別れに際し九条関白兼実公が「ふりすてて　行くは別れの　はしなれど　ふみわたすべき　ことをしぞ思ふ」と詠まれたお歌に対する返歌です。この１カ月後、兼実公は58歳で往生されました。建永２年（1207）３月、上人75歳の時のことです。

大意　名ごりは尽きませんが、おくれ先立つは世の習いです。草葉の露のようにはかない私たちの命です。お互いの身が都で果てようともどこで果てようとも、共に極楽浄土の蓮の台でお会いしようという思いにかわりはありません。

ポイント注意
- 終り４小節の表情に心をこめます。